

願成寺報

令和二年十一月二十六日

〒四四〇・〇八二二 豊橋市東新町二十八番地

☎ 〇五三二一・五二一・九六〇一

報恩講のご案内

- ・秋彼岸同様に、感染対策をして勤めます。
- ・暖房を強力にして、窓などにて換気します
- ・お参りの際はマスクの着用を願います
- ・堂内三〇名の人数制限の場合あり
- ・事前にご連絡いただければ席を確保します
- ・お斎(昼食)と雅楽は中止します
- ・午前・午後共お参りで昼食にお困りの方はご相談下さい

真宗寺院で最も大切な行事です。



十二月 主 曲木 午後一時 餅つき 草取 余

五 日(土) 午後一時半 法要・法話 岡崎市浄泉寺 戸田 栄信 師

午後五時半 お非時(お雑煮)
午後四時 法要 法話 住職

六 日(日) 午前十時 法要・法話 西川 舜優 師
講談のような説話説教 ①

午前十一時 お斎(昼食)
午後一時半 法要・法話 西川 舜優 師
講談のような説話説教 ②

憂鬱に効く薬

心が閉じてしまうとメラニコリーに捉われます。勇気を出して誰かに原因を打ち明けてみては如何でしょう。誰かが見つからなければ、お寺やお墓参りをお勧めします。きっと仏様は暖かい眼差しで、黙って聴いて下さいます。左記を声に出して読むのもお勧めで、今、私も読んでいます。

「念仏申し候えども、踊躍歡喜の心おろそかに候こと、また急ぎ浄土へ参りたき心の候わぬは、いかに候べきことにて候やらんと、申しいで候らいしかば、

「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじ心にてありけり。よくよく察じみれば、天におどり地におどる程に喜ぶべきことを、喜ばぬにて、いよいよ往生は一定と思ひ給うべきなり。喜ぶべき心を抑えて、喜ばせざるは、煩惱の所為なり。

しかるに仏かねて知ろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願は、かくの如きの我らが為なりけりと知られて、いよいよ頼もしく覚ゆるなり。また浄土へ急ぎ参りたき心なくて、いささか所労のこともあれば、死なんざるやらんと心細く覚ゆることも、煩惱の所為なり。

久遠劫よりいままで流転せる苦悩の旧里は捨てがたく、いまだ生まれざる安養の浄土は恋しからず候こと、まことに、よくよく煩惱の興盛に候うにこそ。なごりおしく思えども、娑婆の縁つきで、力なくして終わるときに、かの土へは参るべきなり。

急ぎ参りたき心なきものを、ことに哀れみ給うなり。これにつけてこそ、いよいよ大悲大願は頼もしく、往生は決定と存じそうらえ。踊躍歡喜の心もあり、いそぎ浄土へも参りたく候らわんには、煩惱の無きやらんと、怪しく候らいなまし」と云々

《歎異抄・第九章 字句段落筆者編集》

● 阿弥陀經ノート①・經名

書き直しを恐れず、今、思い浮かぶところを書き留める

佛説阿彌陀經

姚秦三藏法師鳩摩羅什奉詔譯

釈尊が阿弥陀について説かれた經典

姚秦の三藏法師である鳩摩羅什が詔を承って訳す

〔浄土真宗本願寺派・注釈版聖典より〕

・阿弥陀經 浄土三部經（日本の浄土教の根本聖典）の一つ

・姚秦 四世紀末の中国・華北西部の国（ようしん）

・三藏法師 經律論の仏教經典を翻訳した人の尊称

・鳩摩羅什 中央アジア出身の大翻訳家（くまらじゅう）

・内容構成（科文） 上段は 聖教電子化研究会(seitenichogrip)より

序分・証信序 説法の場所／聴衆などを示す

正宗分

讚極樂依正

略讚依正

広讚依正

依報莊嚴

正報莊嚴

勸念仏往生

明念仏往生

往生因

往生果

引証誠勸信

以自証知見勸

引多仏証誠勸

示現当利益

挙諸仏讚我勸

總結成勸信心

流通分

・通夜で読むお経

特に通夜で読むのに有難い（都合がよい？）經典だと思う。

・文字数が少なくコンパクトで読み切るのが容易（小經）

・亡者は浄土に生まれたと安心できる（臨終現前・即得往生）

・亡者は浄土で有縁と出会い直している（俱会一処）

・遺族等に願いを懸けて下さっている（供養他方十万億佛）

・「極樂」の緑り返しに悲しみが癒される

・日常聞き続けるべき經典

実は右記には「執持名号」という条件があつて、その内容について議論があるのだが、死後に福德を求め議論は、証明することができず無益だと思ふ。「今をどう生きるか」がいのちの課題であつて、そのテーマに沿つて釈尊はこの教説を説かれたのに違ひない。

もし、赤子の様に無垢になれば、釈尊の様に、世界に眩しい輝きを見、調和の音楽を聴けるのかも知れない。それが出来ない責任は自分にあると聞き直すのである。

・無問自説の經典

仏説の經典は、誰かの質問によつて説きだされているのが普通だといふ。この經典は日常の居所で、智慧第一の仏弟子・舍利弗に向かつて、おもむろに説き始められている。既に阿羅漢として煩惱を断つた弟子の上に、未だ残っている問題を解こうとしたのである。

・念仏往生の難信と諸仏の護念

念仏にて西方浄土へ往くことを勧められている。この教えは、特に舍利弗には易しすぎて難しいのだと。だから諸仏の励ましを聞きながら懸命にすべきことを成せ。

・参考書

右を概略として本ノートを始めるが、その主たる参考書を記す。

『阿弥陀經に聞く』 伊藤慧明著 教育新潮社

『阿弥陀經に学ぶ』 広瀬惺 著 東本願寺出版

聴衆の歡喜と信受にて価値を担保する

親鸞聖人の御書（報恩講御書第十一通）

・御書

何よりも去年今年、老少男女多くの人々の死にあいて候らんことこそ、あわれに候へ。ただし生死無常のことわり、詳しく如来の説き置かせおわしまして候上は、おどろき思召すべからず候。

まず善信が身には、臨終の善悪をば申さず、信心決定の人は疑いなければ、正定聚に住する事にて候なり。さればこそ、愚痴無知の人も終わりをめでたく候え。如来の御はからいにて往生する由、人々に申され候いける、少しもたがわず候なり。年来おののに申し候いしこと、たがわずこそ候え。かまえて学匠沙汰せさせ給い候わで、往生をとげさせ給い候べし。

故法然聖人は「浄土宗の人は愚者になりて往生す」と候いしことを、たしかに承り候いし上に、ものもおぼえぬあさましき人々の参りたるを御覧じては「往生必定すべし」とて、笑ませ給いしを見まいらせ候いき。文沙汰して賢々しき人の参りたるをば「往生はいかがあらんずらん」と、確かに承りき。今にいたるまで思ひあわせられ候なり。

人々にすかされさせ給わで、御信心たじろがせ給わずして、おのおの御往生候べきなり。ただし、他人にすかされ給い候わずとも、信心の定まらぬ人は、正定聚に住し給わずして、うかれ給いたる人なり。

乗信房にかように申し候ようを、人々にも申され候べし。

なかしこ、あなかこ。

文応元年十一月十三日 善信八十八歳

乗信御房

・由来

親鸞聖人は四十から六十歳位まで関東で過ごされ、お念仏のお仲間を増やされました。その後、經典資料の豊富な京都に戻り執筆活動に専念されますが、当時、正嘉の大飢饉・疫病流行などがあり、関東のお仲間にも悲惨な亡くなり方をされた方が多く出たのでしよう。念仏往生に対する疑いが広まった。「本当に念仏申すだけで良いのか」の質問に答えられたお手紙を御書として戴いています。

・生死無常の確認

老病死の悲しみの世を共に厭いつつ、動揺を戒められます。

・ご自身の信心を明かして疑いを排す

聖人の末娘が、父の臨終に奇瑞のなかった事を訝って「本当に往生したのか」と手紙を母に書いています。臨終の姿に往生を問う時代のなかで、聖人は「臨終の善悪を申さず」と語ります。

「信心決定〓私物化しているいのちを弥陀の願海に返却する事」と考えますが、返却には難しい修行や学問は不要で、ただ疑う心を虚しくする事が大事です。奇瑞は起らず、生活苦もなくなりませんが、浄土に向かつて開かれた確かな生活が始まります。

・法然上人の姿を語って疑いを排す

無垢な人には朗らかに往生を保証し、議論を好み賢々しい人には与しなかった。疑いの鎖を断つのは、納得ではなく信頼する事なのだと教わった。頼もしい法然様の姿を懐かしく記されています。

法然上人没後五十年超の時間が経過していますが、聖人の念仏には、常に法然様との対話があったのだと思います。

・信心相続の難

成功にうかれたり、騙されたり、失敗にたじろんだり、縁によって信心は動揺してしまいます。だからこそ、人々と念仏申し合って欲しい、励ましあって過ごして欲しい。…とのお示しです。

行事予定 令和三年

コロナ感染防止のため内容変更の場合もありますが、日時の変更はない予定です。

一月 一日(金・祝) 修正会

お正月のお勤めです
簡単なお節を準備します
午前十一時

三月 二十日(土) 春季彼岸・永代経法会(成田屋紫蝶師)

落語と法話で楽しく過ごします
お非時(昼食)あり
午前十時

八月 十五日(日) お盆・歓喜絵(住職)

法要・法話で亡き人を偲びます
軽食・花火あり
午後六時

九月 二十日(月・祝) 秋季彼岸・永代経法会(戸田恵信師)

お馴染みの先生の情熱的な法話です
お非時(昼食)あり
午前十時

十二月 三日(水・祝) 本山納骨堂法会・団体参拝

本山へ貸切りバスにて団体参拝します
午前六時半ごろ集合

十二月 四日(土) 報恩講

御開山聖人御恩に報いる法会です
お非時(昼食)あり

一日目 午後一時半
二日目 午前十時、午後一時半

二、十二月 月例会

毎月一日 午後二時

日時変更の場合があります

寺にご確認下さい

後記

○ 分子生物学の成果

新型コロナウイルスに抗するワクチンがmRNAを人工合成して開発されたとのこと。近年の分子生物学の成果には驚かされます。

mRNAはタンパク質の設計図です。必要な時に細胞核でDNAから転写生成されて、合成工場に届けられます。翻訳・部品組立があり、目的の物質を合成し、役目を終えれば分解されます。

それぞれの工程で様々な化学物質が複雑に有機的に働くのだと：小さな細胞内の営みを、ここまで詳細に解明してきた人類の叡知に感動し、今も情熱を注いでいる研究者達を讃えます。

同時に、こんな複雑なシステムを誰が造ったのかと考えます。進化とか、長い時間をかけての偶然の積み重ねとか、そんなことでこの多段階にも複雑で、有機的なシステムが出来上がるとはとても思えません。何かの意思が働いているのでしょうか思えない。

化学物質は意思を持ちません。必要な時にそれに応じた反応が起きますが、では必要とは何でしょう：

細胞が集まって器官臓器、臓器から個体、社会、自然環境、宇宙。何の必要(目的)があつてこんな風になつていくのか：

科学の課題ではないので正解はなくても良いのですが、そう問わずにはおれないのが人間なのかも知れません。

この問いは「良く生きたい」という意思に発しています。又は「生まれて良かった」と思えない場合の叫びかも知れません。科学者は論文に、芸術家は作品に、哲学者は思想に、それぞれ答えを表現するのでしょうか。

○ 真宗坊主の役割

真宗は「願われて生きる」がテーマだと思っています。

どの人のどんな今も、阿弥陀仏に願われて諸仏に応援されている。そのことをお伝えするのが仕事でしょう。

どこまで出来るか分かりませんが、採点基準としておきます。